＝ただキリストと共に歩む＝

水戸無教会

第　７１　号

編集 半 田 梅 雄

※※

キリスト者の戦い
神に向って歩む者⑵……………………………岩　島　　公
テサロニケ人への第１の手紙の勉強⑵……宇　野　　輝
エレミヤ書ノート⑴……………………………野　本　和　幸
一人学ぶ者への恩恵……………………………檜　山　喜久代
後　　記

※※

キリスト者の戦い

戦いに種々ある。肉体、武器、策略、経済その他いろいろな方法と手段もってする戦いがある。これらの戦いに、共通するものが二つある。その一つは、「戦いの目的が、自己又は自己の属する集団の利益にあること」、その二は、「戦いの原理が優勝劣敗にあること」である。〝弱肉は強口に食われる。〟

これが、この世における戦いの普遍的原理である。

これらの戦いと明確に目的を異にし、原理を異にする戦いがある。この戦いは、地上における自己の利益を目的としない。競争相手を倒して、自らが支配の座に着くことを欲しない。勝つことではなく、むしろ敗れることをいさぎよしとする。その世界では、尊ばれるのは強者ではなくして弱者である。実に世にも不思議な戦いである。

しかし、不思議ではあるが、この戦いはたしかに世に実在する。いや、過去に実在し、現に戦われ、未来も永遠に消え失せることはないであろう。聖書を見よ！キリスト・イエスの生涯は、まさしくこの戦いの連続であった。キリストに生きるものは、彼と共に黙々と十字架の道を歩みつつ、永遠の勝利の栄光に包まれる日を確信するのである。　（平　田）

神に向かって歩む者（二）

岩島　公

ロマ書十四・十―十二に基づいて、話の第二部、「キリストにある独立」ということについて、今日わたくしの心を占めていることを簡単に申し上げたいと存じます。

も一度、十―十二を読みます。

10それだのに、あなたは、なぜ兄弟をさばくのか、あなたは、なぜ兄弟を軽んじるのか。わたしたちはみな、神のさばきの座の前に立つのである。 11すなわち、「主が言われる。わたしは生きている。すべてのひざは、わたしに対してかがみ、すべての舌は、神にさんびをささげるであろう」と書いてある。12だから、わたしたちひとりびとりは、神に対して自分の言いひらきをすべきである。

ここは、十四章一節からつづいて「兄弟をさばくな」ということを言っているのですが、ここの重要な意味は二つあります。

第一は、十、十一節によって、わたくしどもは、神の前にさばかれるもので、さばくことは不可能だということ。

第二は、十二節で言っている通り、「だから、わたしたちひとりびとりは、神に対して自分の言いひらきをすべきである。」ということであります。

第一の意味は、八節の「わたしたちは主のものなのである。」と、四節の「他人の僕をさばくあなたは、いったい、何者であるか。彼が立つのも倒れるのも、その主人によるのである。」で明瞭になります。わたくしどもは神に従う僕であり、さばきは、ご主人である神が、一人一人の心の底を、人間ではわからないところまで見通してなさることだから、人間の分際で、信仰の問題について他人をさばくことは不可能であり、傲慢であります。そもそも、信仰とはひとりびとりと神さまとの直接関係であって、他人がくちばしを入れる余地は全くないのであります。

第二の、「神に対して自分の言いひらきをすべきである。」というのは、五・六節で、「ある人は、この日がかの日よりも大事であると考え、ほかの人はどの日も同じだと考える。各自はそれぞれ心の中で、確信を持っておるべきである。日を重んじる者は、主のために重んじる。また食べる者も主のために食べる。神に感謝して食べるからである。食べない者も主のために食べない。そして、神に感謝する。」を受けていると思います。すなわち、聖書は信仰について原理を示し、個々の具体的な問題は、信者の信仰による判断にまかせております。だから、そういう具体的な実践となると、人によって判断が異なって来ます。パウロは、それはそれでよい、だが、その判断には確信がなければならぬ。そのおのおのの確信するところを、さばきの座に立った時に

のべて、自分の行為について言いひらきをすべきだというのです。

ヨハネ三・十八に「彼を信じる者は、さばかれない」とあるのに、ここでは「さばきの庭に立つ」とあるのは矛盾のようですが、前者は救われるか滅ぼされるかの審判で、後者は信者の諸の行為の審判であるのであります。

さて、わたくしは、話の第二部は、「キリストにある独立」についてのべると申しました。どこからそのような意味をわたくしはとらえるか。

それは、「わたくしたちひとりびとりは、神に対して自分の言いひらきをすべきである。」ということに関してであります。

「言いひらきをする」必要はどこにあるのか。

そもそも、信仰の具体的実践は、すべて、自分がただひとりで、祈って神の前に決断して進まなければならないことばかりであります。いかに立派な先生のでも、真似ごとでは神に向かって信仰を生きるものではありません。そのような、何ものをも真似しない、真に自己の判断に基づく行為は、世の人々に承認されることは少ない。神さまも何とおっしゃるか、神さまの前に出て伺ってみなければわからないのであります。だから、自分の信仰にかけて決断し、実行したことを、「わたくしはこう信じて、こう行って来ました。」と言いひらきをしなければならないのです。けれども、言い開きをする場が与えられているということは、神さまだけに向かって生きて来たものにとって、何というありがたいことでしょう。しかし、それは、パウロの言うように確信ある決断でなければなりません。確信なくして、神さまに向かって、正面切って申し上げることはできよう筈がありません。

それでは、いかにして確信ある決断ができるか。第一は、キリストの十字架によって、罪はすっかり赦されていることを信じていること、第二は、神さまのため、キリストのためだけと思って、人を愛するために決断すること、であります。このような信仰にあって、このような態度で問題を決断して生きる者は、み前に出て恐れることなく申し開きができます。なぜなら、そのような第一の信仰も、第二の態度も、恩恵により、キリストから賜わったものであるからであります。かくして、神以外は何ものをも恐れぬ「キリストにある独立者」となるのであります。キリストによらずして、独立はありません。キリストを信ずる者に、この独立を賜うのであります。キリストにあって、神に向かって歩む者に、歓喜があり、独立があるのであります

一九七三年のクリスマスにあたり、このキリストにある歓喜と、キリストにある独立を賜わった神とキリストに、心からの感謝を捧げるものであります。

テサロニケ人への
第一の手紙の勉強（二）

宇野　輝

彼等の中でも、ことにバリサイ派の人々は伝道心が旺盛であった。「改宗者を得んがために海やまを経めぐりて」伝道した（マタイ二三・一五）。

でも、当時、アジヤに発生して、首都ローマへ、ローマへと進展を試みつつあったいろいろな東方宗教、ことにローマ軍人貴族達の間に尊崇を集めていたミトラス教や、商人や、航海者農耕牧畜者達の大衆に人気のあった小アジヤの母性神のエペソの大女神アルテミス（使徒行伝十九・二三―四一）＝その神殿の壮麗さは当時の世界の七不思議と言われた＝等に比して、ユダヤ教は小さい存在であった。小さい存在ではあったが、多くの御利益宗教の中にあって、ユダヤ教徒の特質は厳しい戒律に精進し厳格な道徳性を堅持した。それはエホバの神の聖と義に発する。ユダヤ教は、弛緩腐敗した性道徳の宗教と、そこからかもし出される頽廃した社会の中で潔癖であった。しかも「ユダヤ人の成人男子十人の住む所には会堂が建つ」と言われる程、彼等の住むいたる所の都市に会堂（シナゴーグ）を建設して、安息日の礼拝を守った。この民族的生命である礼拝に大きな役割を果したのが、七〇人訳の通俗ギリシャ語訳の（旧約）聖書であった。

この七〇人訳ギリシャ語訳聖書は民族の宗教的生命の枯渇を防ぐ目的で、紀元前三世期頃、アレキサンドリヤに集ったユダヤ教の学達達によってはじめられ、その完結は紀元後二世期と言われる。ヘブライ宗教が、ことばと文字の宗教で、感覚的祭儀宗教でなかったことの意義は大きいのである。エルサレムの神殿は崩れても、「律法の一点一割は崩れなかった」のである。彼等はヘレニズム世界のシナゴク（会堂）を中心に活動をつづけて、軈てユダヤ教を母胎として起ったキリスト教と生命の火花を散らしつつ橋渡しの役割をつとめた。

これら祖国から離れ住んだ海外のユダヤ人達は、既に異邦人社会に永年住みついて、ヘブライ語（或は当時はアラム語が主力か？）の旧約聖書を読むことができなかった。彼等は、安息日ごとに会堂で読まれ、又講解される七〇人訳のギリシャ語訳聖書によって、エホバの選民であるとの民族的自覚を教育された。離散の民は聖書によって一つに結ばれた。会堂は礼拝のほかに初等の教育施設でもあった。ユダヤ人の教育水準が高かったと言われることと無関係ではあるまい。

そしてパウロが福音伝道に活動した当時は彼等離散のユダヤ教徒達の魂は、祖国を遠く離れた海外にあっても尚、エルサレムのシオンの丘に結ばれていた（紀元七〇年にエルサレムはローマ軍により崩壊）。エホバの大庭を慕うエルサレムへの巡礼は海外ユダヤ教徒のあこがれであった。（詩篇八四篇）。ましてユダヤ人にとって、「祭」といえば過越の祭を意味するほど意義深い―一週間に亘る祭典の日日をエルサレムの神殿で祝うことは彼等の歓喜でさえあった。幾万のユダヤ教徒が海山の旅路の労苦をいとわず、喜びの宮もうでの歌をうたい交しつつエルサレムに参集した。

罪の贖いの恙の屠られるこの過越の大祭日を選んで、イエス様が十字架につかれた意義は深い。私達も、その血によって、神様の審判を過越して頂いたのである。ヘブライ宗教にあって血は生命であった。人格の犯した罪は（捧献の獣ではなく）ついに人格が、しかも聖なる神の御独子なる人格が贖に立たれ、その生命を私の敗血の中に注がれたのである。イエス様こそは人となり給いし神。私達はそのみまえに改めて、己が罪が要求するものが、如何なるものであるかを知って、審きの深さに慄然とする。唯、首を垂れて黙し、再び新になる思いをもって十字架を仰ぎ視るのである。ヘブル書記者の大文字が心に浮び、讃美歌百番が黙想されるのである。（ヘブル人への手紙九・十一―十五）。

註　過越の祭については出エジプト記十二・十一―十四と紅海渡渉の十五章迄参照。

エルサレムにはこれら海外居住のユダヤ教徒が建てた彼らの都市別による、或は職業組合別の会堂が沢山あった。使徒行伝の六・9の「リベルデン」の会堂に属する人々」とは、各地方出身のこういう会堂に属する人々であった。又使徒行伝二章のキリスト教のエルサレム教会員への聖霊降下の日に当るユダヤ教の五旬節の祭も、本来は過越の祭から五〇日後の（日本の暦では五月下旬頃に当る）小麦の収穫感謝祭であるが、ユダヤ教ではこれを、ユダヤ人が出エジプト後、荒野の旅をつづけて、五〇日目にモーゼがシナイ山で神から律法をさずけられた記念の日としたのである。この祭にも海外の諸地方から、おのおのその地方語を話すユダヤ人が沢山エルサレムに参集した。使徒行伝二章九―十一には参集した人々の出身地の表が出ている。紀元五八年春の頃、コリントからエルサレムへむかったパウロ一行も、何か期する所があって五旬節にまにあうようにと旅を急いだ。このとき一行がたずさえたギリシャ各地の教会からの、エルサレム教会の貧しい兄弟達を助けるための献金も一面には海外の教会の経済的に活発な活動と、非生産的エルサレム教会員の窮乏を暗示する。又一面にはユダヤ教徒のモーゼの律法の十分の一献金、エルサレム神殿への献金の思想がキリスト教会にも承け継がれて、献金が愛によって行われるよき習慣の基礎となったのではないかと思う。パウロも聖書を七〇人訳ギリシャ語訳聖書（旧約）で読み、考え、引用し、話したと言われる。勿語パウロはアラム語の聖書も自由に読めた筈である。使徒行伝二一・四〇。

註　但し使徒行伝二二章のパウロの演説については問題を残す。

石原兵永先生の「パウロの生涯」P214参照。

註　新約聖書の編集がほぼ完結したのは紀元二〇〇年頃である。従ってパウロは福音書も知らず、まして自分の手紙がキリスト教徒の正典になる等は予想もしなかったのであろう。当面の必要に応じて書いた書筒である。それ故パウロにとっても、ユダヤ教徒にとっても、経典（カノン）はあっても、旧約、新約聖書という言葉は通用しないのである。

「聖書」といえば、凡て今日の旧約聖書に当る。

古代世界の都市には、それぞれの都市に守護神が祭られ、神殿があった。住民の多くが氏子の関係にあったと思われる。私達グ

ループのKさんが、水戸の農村でいろいろ村の交際や因習にめげず信仰を守っていられる。パウロの当時にも、小アジヤやギリシャの都市で、これら異邦人の偶像宗教にかこまれながら、安息日毎にユダヤ教の会堂で行われた潔い礼拝と信徒の真面目な道徳的生活が、これをとりまくギリシャ人はじめ、地域住民の注目と尊敬を集めたのである。（勿論、福音が伝えられて新たに生れたキリスト教の集会も同様であった）。便徒行伝中の「神を敬う人」十・三五、十六・十四、十八・七というのは、敬意をもって心を寄せ改宗した異邦人である。

これらの異邦人がエホバの神を信じるに当って、最も障害になった問題が三つある。

一つはモーゼの律法とされていた、割礼を受けなければ救われない。（このことは具体的には教団加入が認められず、兄弟の交りが許されなかったということ）。即ち異邦人改宗者は割礼を受けることよって、はじめてユダヤの民籍を与えられ、兄弟の交りが許されたのである。

二つめは、偶像の神殿に捧げられた獣の肉は汚れたものとして口にしないということ。ユダヤ教の会堂のある都市にはまたそれぞれの都市の守護神の神殿があり、その信奉者達によっていけにえの獣が捧げられた。神殿の神官達は、屠られた肉を町の業者に払い下げて、一般に市販されたのであるから、これは生業に活動する者にとって、異教徒の家で食事を共にしないという誡ともからんで、面倒な論議を呼んだのである。（コリントI・五・十）。尚ユダヤ人は人の食べる豚肉を最も汚れた動物として、一切口にしなかった。

三つめは、偶像を礼拝する異邦人との交りを避けるということである。一般に堅い信仰のユダヤ教徒は異邦人との交りを極力避けたばかりか、同族でも収税人や不信者らとの交際をしなかったのである。一般に誡律を守るに厳しいユダヤ教徒が、戸外から帰宅した時、身を潔め、食事の前に手を洗う等の慣習も偶像の異教徒の汚れから身を潔める信仰の表れである。海外にあっても会堂で安息日を守ったユダヤ教徒の、これらの習慣はパウロ等の福音伝道によって、ユダヤ教から分離したキリスト教のエクレジャの中にも、そのまま持込まれたのである。もしも偶像の神殿からの肉を食べると、偶像の霊が身内に宿る、又もしもその獣が捧げられる時、その生命である血が完全に絞られていないと、律法違反になる等々、小心翼々のクリスチャンは、むしろ安全な野菜を食べたのである。（ロマ十四・二、コリントIの八・九ー十三）。さて、これら地中海の諸都市に百四、五〇もあったといわれるユダヤ教の会堂には、故国パレスチナはじめ諸地方から、熱心な巡回伝道者が（ことにパリサイ派の）訪れ、会堂司は安息日に奨励説教を許したのである。実は基督者パウロも、これらユダヤ教の巡回伝道者の一人と見做されて会堂で説教者として迎えられたのである。それは、私達がテサロニケ第一の手紙の四章五章で学んだように、当時の信者一般の間に、再臨信仰の期が切迫していた。地の果迄、異邦人伝道の使命感に燃えたパウロは、ローマ帝国内に十字架福音の保塁を築くべく、多くは帝国の軍道に沿った戦略の拠点である要衝の都市から都市へ、まさに神の備え給うた畑である会堂から会堂へ、福音の種子を播いて馳せたのである。しかし、このパウロの伝道方法は、会堂のユダヤ教徒の側からす

れば充分な言い分があった筈である。それはまさに真理の対決を求めて–感話会でN兄も言はれた如く–「なぐり込みをかけての対決」とも見做される。ユダヤ教徒が営々と努力して築いた会堂である。救を求める真面目な異邦人達がそれをとりまいている。そこへ巡回伝道者パウロが来て、近頃、ガリラヤの田舎大工で、エルサレムの大祭司はじめ宗教最高法院（サンヘドリン）の判決で、異端のラビとして、ロマ人の手で、呪いの木にかけられたイエスという者を、彼等ユダヤ民族が待望するメシヤ（キリスト）である杯ととんでもない異端の説教をするばかりか、そんな奴を信ずる信仰丈で、モーゼの聖なる律法も割礼も不要である杯と。まさに彼等の伝統的信仰を侮辱して、真っ向から挑戦の説教を弄する異端の偽ラビ、パウロと。こと信仰に関しては生命をかけることも辞さない熱狂するユダヤ人である。パウロに対する反撃の迫害は厳しかった。ユダヤ教のこれ等の地方の会堂は信徒に対する略式裁判権をもった。（マタイ十・十七。マルコ十三・九）。パウロも　「石で打たれしこと一度」（使徒行伝十四・十九。コリントⅡ十一・二五。）といい、「ユダヤ人から四〇に一つ足りないむちを受けたことが五度」（コリントⅡ、十一・二四）と言ったのは、いずれもユダヤ教の瀆神罪に対する会堂の「地方分権のサンヘドリン分院判決」＝ラビに対しては長老三人の決定。（ダニエル・ロブス。イエス時代の日常生活２　Ｐ二三。ではないかと思う。四〇の鞭は四〇の数がユダヤ人の聖数故三九でとどめたが、肉が裂けて半死になったという。ルステラに於ける石打ち刑は激こうしたユダヤ教徒達によって突発したものであろう。（ステパノの石打ち、使伝七章）。パウロを産んだベニヤミン族は、古来イスラエルの歴史に偉大な人物を送った。王業半ばにしてギルボア山の露と消えたサウルとヨナタンも（サムエル前三一。サムエル後一・十七。ダビテの弓の歌）。王国滅亡の彼方にエホバへの信仰の火を伝えたエレミヤも、そして十字架福音の火をもてローマ帝国を潔めたパウロ。いずれもベンジヤミン族の出である。熱誠であり、情熱に燃え、剽悍不屈の斗志は、まさに不死身の豹か「獲物に喰いついた狼」を思わしめる（創世四九・二七）。コリント人への第二の手紙十一章にしるされたパウロの苦難の表は、その一ツ一ツに煮込まれた、汗と、血と熱涙がどのような厳しいものであったかを冥想せしめる。

エレミヤ書ノート（一）

野本和幸

はじめに––––

水戸の集会でエレミヤ書を毎月第二週に担当するよう仰せ付かってから、既に三年余が過ぎようとしております。その間のたどたどしい歩みは、正直のところ私にとって、多く精神的重荷であり、苦痛でさえありました。純にしてひたむきなエレミヤの心情と生き様と、自分の現実との余りの懸隔に、集会で語る度に、いつも「お前などに語る資格はない！黙せ　偽善者！」との背後よりの声を聴き、畏怖の念に襲われないことはありません

でした。幾度か悲鳴をあげながら、にも拘らず、とにもかくにも頽れずに支えられたのは、集会に連なる方々の、直接にあるいはお便りをもっての、その度毎のお叱り励ましであり、祈りでありました。いかに貧しき聖書の学びといえども、友の祈りと支えなしには不可能でありました。このように支えられて三年、エレミヤの生きた時代に親しみを増すと共に、最近次第に、エレミヤ書の学びのうちに、心の奥深くから湧きあがってくる静かな感動や歓びを覚えることが多くなってまいりました。誠に「御言葉に養われて」とはこういうことであろうかと思います。こうして、今ようやく、エレミヤ書を本当に学び聴く出発点にたどりついたのではないかと感じます。過ぐる十二月、宇野輝兄より、エレミヤ書一章六ー七節をひかれて、水無誌にエレミヤについて書けとの、一つの「命令?!」がとどけられました。貧しい学びに寄せられた励ましのようなお叱りのような兄のこの「要請」を、私は回避できないと感じました。そこで自らの不信仰も無知も顧ず、エレミヤ書に学びえたところ聴きえたところを記していきたいと思います。以下は、いかなる意味でも研究などと称せられるべきものではなくて、ただ信仰の先達、旧約研究の先学の後に従ってたどる全くの素人による「エレミヤ書覚え書き」にすぎません。

一、エレミヤ時代の国際情勢

イスラエルの予言者は、主として、イスラエルの民全体の運命に第一の関心を寄せた人々であり、いわゆる個人の＊魂のみとりはむしろレビ人祭司の役割りであったとも言われます。のみならず、イスラエルの予言者達はいずれも、歴史を超越した永途的な真理や善について語ることを第一の関心事とはせず、彼らに托された神の言は、いつでも特定の歴史的状況下での特定の言でありました。それは、「二度と繰り返されることのない民の歴史の特定の時の、二度と繰り返されることのない出来事のうちに捕えられた、特定の民へとさしむけられた特定の指令」(1)なのでありました。更に予言者の言は「本質的に、民が経験しつつあるないしいままさに経験しようとしている出来事を、神の要請と約束の光の下に、解釈するところの言」(1) であります。しかし予言者の言葉がこのように歴史の底の底まで喰い入った言であったが故に、逆に、はるかな過去の特定の状況に向けられた特定な言であるにもかかわらず、時の試錬に耐えて、今日の私達をも鼓舞し導き、かつ根源的問いかけを迫る力をもつという逆説が成り立つといえましょう。

註(1) JOHN BRIGHT, JEREMIAH, INTRO・XXVII, 1965

＊ゼール・ゾルグ

以上のことは、紀元前七世紀から六世紀に活動したエレミヤの場合に、とりわけあてはまるといわねばなりません。彼の生きた時代は、近東世界の狂乱怒濤の時代、南ユダ王国滅亡の時代であ

りますから、エレミヤという人物を理解するためには、どうしても、その前後の、イスラエルを囲む国際情勢、イスラエル内部の社会的状況といったものについて、私達は最小限の理解を求められているといえましょう。（そのための聖書での資料は、エレミヤ書は勿論ですが、「列王紀」下二十一章ー二十五章、「歴代志」下三十三章ー三十六章その他を御参照下さい。）イスラエルは、ダビデ、ソロモンの統一王国後、紀元前九二二年既に、南ユダ王国と北イスラエル王国とに分裂し、北イスラエル王国の首都サマリヤは、アッシリアのサルゴン王により七二二年陥落してしまいました。以下簡単に、エレミヤ時代の国際情勢について記してみます。エレミヤの予言活動は、三期に分かれますが、それに即して見てみようと思います。⑵

註⑵ 先述の資料及びジョン・ブライト「イスラエル史」（下）など参照。

（一）エレミヤは、紀元前六五十年頃、エルサレム北東七キロ程のアナトテに生れて、六二七年二十三才頃予言者として召命をうけ、ヨシヤ王による宗教改革まで数年間、第一期の予言活動を行います。エレミヤの生れた頃の南ユダ王国の王は、マナセ（在位六八七ー六四二）でした。この頃、アッシリア帝国はその最大版図に達しており、テーベまで侵略されて、エジプトの第二十五王朝は六六三年、アッシリアにより滅ぼされてしまいました。それ故、マナセには、政治的には、アッシリアの忠実な領臣として以外に、生きのびる途はありませんでした。しかしその結果は、ヤハウェ宗教に重大な影響を与えました。アッシリアの宗教が、大規模にヤハウェ宗教に混入し、ヤハウェ宗教は全くの多神教に転落する危険に陥ったのです。列王紀の記者は、マナセ王を、ダビデ以来最悪の王との烙印を押しています。ところが、アッシリア帝国はその勢力の頂点に達すると共に、崩壊への途を歩みはじめます。バビロニアにはカルデヤ人がおり、エジプトではプサンメティコス二世の第二十六王朝が始まり、北からはメディア人、コーカサス地方から蛮族スクテア人が侵入してきました。南ユダでは、マナセの死後、アモン（在位六四二ー六四十）が王となりましたが、宮廷の高官達に暗殺されます。しかし地主階級である「地の民」は、すぐ暗殺者達を処刑し、八才の王子ヨシヤを王としました。アッシリアが弱体化するにつれて、ユダの独立運動は勢いを得ていきました。ヨシヤは、有名なヨシヤの宗教改革に乗り出して、アッシリアの神々を拒否し、またアッシリア領となっていた北イスラエルの領土を支配していったといわれます。そしてヨシヤの改革が頂点に達した頃（六二二年）、アッシリアは瀕死の状態にあり、ユダは名実ともに自由な国となったといわれます。以上がエレミヤの第一期予言活動の政治的背景です。

しかしながら国際情勢は早くも次の動きを開始します。アッシリアに替り、バレスチナとシリアは、バビロンとエジプトの二大帝国にはさまれてその餌食となります。つまり、カルデア人ナボ

ポラッサルが六二六年には、新バビロニア帝国を創始していました。一方エジプトは、バビロンを牽制し、パレスチナ・シリアに勢力をはるため、弱体化したアッシリアと同盟しました。六百九年エジプトのネコ二世（在位六百九年～五九三年）は、アッシリアを助けんとして、ユフラテ河畔カルケミシに進出、途中メギドでこれを阻止しようとしたユダのヨシヤ王は、そこで戦死してしまいます。（六百九年）。メディア人と結んで六一二年ニネヴェを滅ぼしていたバビロニア軍は、エジプトの援助にもかかわらず、六百九年アッシリアを完全に滅ぼしてしまいます。

（二）そこで、エジプトのパロ、ネコはユフラテ河西のパレスチナ・シリアの支配を固めようとし、ヨシヤを次いだユダのエホアハズ王をわずか三ヶ月でエジプトに追放、その兄弟エホヤキムが、エジプトの領臣として王位につけられ、かくてユダの独立は失われました。ユダの民は、エジプトの重税に苦しめられ、またエホヤキムも小暴君にすぎませんでした。このような時代を背景にエレミヤの予言活動の第二期がはじまります。つまり第二期の活動は、ヨシヤ王の戦死（六百九年）から、ユダの第一回バビロン捕囚（五九七年）まで、エレミヤ四十一～五十三才の壮年期にわたります。

ところで、六百五年、ユダは新しい危険に直面します。バビロンのネブカドネザルは、カルケミンにおいて、エジプト軍を打ち破ったのです。ユダはこの事件に仰天し、エホヤキムは一転、ネブカドネザルに忠誠を誓い、その領臣となります。こうしてユダは今度はバビロニア帝国の臣下となりました。しかしエホヤキムは喜んでバビロニアに従ったのではなく、実はエジプトを頼みにしていたのでした。六百一年、バビロン軍とエジプト軍は戦斗を交え、双方ひどい損害を蒙り、一担ネブカドネザルは帰国しました。これに乗じてエホヤキムは、バビロニアに反逆しました。これがその後のユダの運命を決定した自殺行為でありました。やがて五九八年末バビロン軍は進軍し来たり、エホヤキムは病死します。（暗殺されたともいわれます。）その子エホヤキンが王位につきますが、三ヶ月後エルサレムは陥落（五九七年）、ユダのエリート層は第一回バビロン捕囚となります。

（三）エレミヤの第三期の予言活動は、捕囚後（五九七年）から五九六年の第二回バビロン捕囚後エジプトに連行されて、やがて殉教の死をとげるまでにわたります。第一回捕囚により、ユダはバビロンの属国となり、エホヤキンの叔父ゼデキヤが、バビロニアの傀儡として王位につきます。しかしユダに残った人々に優れた人物はおらず、ゼデキヤ自身も、善人ではあるが小人にすぎませんでした。

ユダ国内では、バビロニアのエホヤキンに望みを託する人々と、ゼデキヤに頼む人々との二派が絶えず騒動をおこし、ついにエジプトの後押しもあってか、五八八年ゼデキヤは、度重なるエレミヤの苦言にもかかわらず、狂信的愛国分子におされて、バビ

ロニアに反旗を翻します。しかし直ちにバビロニアは報復にでて、五八六年、エルサレムは徹底的に破壊され、有力者の多くは処刑され、他は第二回の決定的捕囚となりユダ王国は滅亡します。こうしてユダは、バビロニア帝国の属領となり、総督に貴族出身のゲダリヤが任命されます。しかし、ゲダリヤは恐らく二、三ケ月の間にこれまた狂信的愛国者イシュマエルにより殺害され、人々はエレミヤの反対にもかかわちず、ネブカドネザルの復讐を恐れて、エジプトに逃亡し、しかもエレミヤをも連行してゆきます。

このように、南ユダ王国は、マナセ即位の六八七年から、五八六年の滅亡までわずか百年間に、アッシリアの領臣、一時的独立、エジプトへの隷属、バビロニアへの隷属、ついにはバビロニアに対する無益な反逆の中に自滅していったのであります。エレミヤは、まさにこのように祖国が、大国間の覇権争いにまきこまれて、滅亡への途を転がり落ちてゆく狂乱怒濤の惨劇の中に、生死をかけて神の音信を伝えようとしたわけであります。

一人学ぶ者への恩恵

檜山　喜久代

ただキリストと共に歩む懐しい水戸無教会誌をお恵みいただき、むさぼるように夢中で読ませて頂きました。聖霊の御力にみちみちた「聖なるものを求めよ」の力強い御言葉に、もう一度純真な心にかえって、神を見上げることを強く教えられました。折々に心にとめて下さいまして、温かい御導きをいただき、心から感謝申上げます。

牧師もなく、先生もなく一人一人が、真剣に熱心に御聖書を勉強していらっしゃる、それだけに他にないしっかりとした堅い信仰を持っていられることがうかがえます。イエスキリストの歩みを自分のものとして、ひたすらに神に従う生活のはげしさやきびしさや温かさが、私の心にも伝って来て感動いたしました。皆さまのたゆみない歩みが、聖霊の御力によって高められ、清められてゆくのでしょうね。何とすばらしいことでしょう。この世にない喜びが味わえます。

私も無信者の中にいますが、イエス様にある愛によって、まわりの人に接し得られるようにと心掛けております。最近、近くの教会の若い娘さんが、物を売りながら伝道に来られ、信仰のお話から親しくなりました。その後水戸に移られましたが、お便りで

励まされたりしております。他の方も見えて教会へ来るよう言われますが、やはり石原先生の御本で聖書を学んで行きます。

いろいろ苦しいこと困った事に出会います。罪の根がたちきれません。それ故肉体に一つの刺が与えられて、信仰を忘れないようにされているのだと思います。でも苦しさに会う度に、新しくのがれる道が備えられている事を知り、驚きと共に大きな喜びを感じます。苦しみに勝る恩恵をいただける幸せ、もったいなくて、涙しながら感謝のお祈りをします。ほんとうに弱く貧しい者ですが、イエス様を知る故に喜び支えられて生活しております。折々にはどうぞ御導き下さいますよう御願い申し上げます。そして水無誌を通してまかれた種が芽を出し、多くの人の間で成長し、発展されますことを心から願ってやみません。

御誌によりますと松本様御不快の御様子、どうぞ一日も早く御回復なさいますよう心から祈り上げます。幼稚園へ一度御邪魔させて頂いたことを思い出しました。（後略）

『後記』○　本誌の再刊に際して、多くの方々から喜びと励ましを頂き、感謝しております。全部の方々にお返事を差上げることができず心苦しく思っておりますが、本誌の続刊によって、責任の一端を果さして頂きたく思います。

○茨城県東海村の原子力研から東北大学に移られた吉原賢二兄は、インフルエンザの予防接種事故によって、御二男を重度の心身障害の被害者とされ、国と社会の責任を激しく問うておられます。

○四月二十三日、その吉原兄によって、水戸とのつながりを持たれた日立市の林さんの新築家屋の定礎式に招かれて、式辞を述べました。林夫人は、高橋三郎先生の録音テープ集会の責任者ですが、当日は青空天井の下で、六人程の姉妹たちが集まり、新築される家が、神さまの御用のために用いられるようにと真剣に祈り会いました。こんなに簡素で厳粛な祈りの集いが持ち得るところに、福音のみに生きるものの自由さがあると思いました。高橋先生もこの日この時間に祈って下さるとのことでした。東京、水戸、日立、仙台、それは四つの点に過ぎないのですが、福音の糸によって、しっかり結びついている愛と信頼の線であることをしみじみと思います。

○本号より野本兄のエレミヤ書ノートを掲載します。兄は茨城大学勤務、奥様が御病気のため二人のお子様の面倒を見ながら原稿を書いて下さった由、吉原兄といい、野本兄といい、エレミヤ書を講ずる人の苦難が、エレミヤに直接ふれる思いがします。祈ります。

（半田）

水戸無教会　第七十一号　　水戸市緑町三―九―二六　　発行人　松本文助
昭和四十九年五月発行　　水戸幼稚園内　　編集人　半田梅雄　　（実費七十円　〒二十円）